安田女子大学大学院紀要　第24集　2019
教育学専攻

子どもにとって「ナナメの関係」は どのような役割を果たしているのか

―生徒指導・進路指導において児童生徒の多面性を受容する存在として―

澤　田　英　三

What is the Role of Diagonal Dyadic 'Naname' Relationships for Young People ? : Acceptance of the Multifaceted Aspect of Each Student at School

Hidemi SAWADA

The present study considered the following aspects of young people's relationships: vertical dyadic 'Tate' relationships between the young person and his/her parents or homeroom teacher, diagonal dyadic 'Naname' relationships between the young person and other adults, and horizontal dyadic 'Yoko' relationships among his/her peers. Recently, diagonal dyadic relationships between the young people and other adults have undergone a reduction in intimacy. Firstly, for young people, the roles of the diagonal dyadic partners were defined as follows: (1) a conversation partner or a playmate, (2) a mentor, (3) a translator, (4) a mediator, (5) a purveyor of other views, lifestyles, or values, and (6) a role model. Secondly, we note that various teachers other than the homeroom teacher were able to develop a diagonal dyadic relationship with the student at school, and that these relationships were worked out during student guidance and career guidance. Finally, we find a need to develop systems in which busy teachers can exchange various kinds of information about their students with each other.

キーワード：Diagonal Dyadic 'Naname' Relationships, Adolescent Development, Student Guidance, Career Guidance

地域の人間関係の希薄化が指摘されるようになって久しい。特に，子どもと関わる大人が地域の中からも親戚の中でも少なくなり，また関係を持たなくても生活できる便利な環境にもなってきた。一方，子どもたちが日々生活する学校に目を転じると，教職員の多忙化が進み，担任であっても子どもと関わる十分な時間を取ることが難しくなってきている。担任以外の教職員はなおさらである。このように，子どもを取り巻く人間関係の希薄化は，大人との関係，特に「ナナメの関係」の希薄化と言い換えることができる。本稿では，子どもの人間関係を「タテ」「ヨコ」「ナナメ」の3方向からとらえ，かつては地域や親戚の中で多くの大人とのつながりとしてあった「ナナメの関係」のもつ役割・機能を明確に示すことが第1の目的である。そして，現代において

子どもたちが日々過ごしている学校が，「ナナメの関係」を形成する場所として相応しいことを指摘し，その関係を生徒指導･進路指導に活かす必要性について論ずることを第２の目的とした。

なお，本稿では，「ナナメの関係」についてカタカナ表記を用いる。この関係について初めて論じた笠原（1977）は「斜めの関係」と漢字で表記していたが，その後の論者などがカタカナ表記を用いていることや，文部科学省も文書等でカタカナ表記を採用していることから，本稿でもそれに倣う形をとった。

１．ナナメの関係とは

精神療法家の笠原（1977）は，子どもの人間関係を3つの方向からとらえた。子どもの人間関係といえば，子どもと親や担任教師のようなタテの関係と，友だち同輩同士のヨコの関係があげられるが，親や担任とは異なる大人との関係を「斜めの関係」（以下，ナナメの関係）と名付けた。そして彼は，大人との関係を避けて内閉する青年への精神療法について論じる中で，青年に対する有効な治療者の立ち位置として，父親や教師，上司といった直系的関係ではない中立的な関係の有効性を指摘した。

それでは，直系的関係である親や担任教師との関係はどのような特徴があり，精神療法においてなぜそのような関係がうまく作用しないのであろうか。笠原（1977）によると，息子にとっての父親は，「対世間的面目や責任」をとる立場にありながらも，親子であるがために「情緒的にまきこまれたり，愛憎のしがらみに溺れるといった危険」がある。また，担任教師は，「自分のクラスの子どもの不登校に対し中立の態度はとれない。登校しない子どもの存在が教師としての自負をゆるがす以上，意識的無意識的に子どもを責める気持ちになることはやむをえまい」として，学校において担任は子どもに対して第一に責任を持つタテの関係であるととらえた。この直系的関係に対して，ナナメの関係の例として，子どもとは近しい間柄である「叔父－甥（ないしは叔母－姪）的関係」をあげている。この関係は「父親とは違い，叔父はとらわれない視点を青年に向けることができ」，「甥のほうも叔父に対してなら，息子として父に対する場合には見せられない顔を見せることができる」のである。そしてナナメの関係を，青年に対して「無責任でありうる程度に応じて，それだけ青年の言葉に素直に耳をかし考える自由度を増す」関係として特徴づけている。このように，子どもに対して育て導く責任を負っている親や担任教師は，子どもに対して中立的な立場から関わることが困難であり，情緒的に巻き込まれた関わりとならざるを得ず，これがタテの関係の特徴といえるだろう。一方で，その子どもを育て導く責任が軽くなればなるほど，情緒的に距離をとることができ，目の前の子どもを育ちつつある一人の子どもとして冷静に受け止めることができ，一人の大人として意見を返していくことができる。

それでは，このようにとらえることができるナナメの関係は，その後の研究や言説でどのように扱われてきたのであろうか。

２．笠原（1977）以降の「ナナメの関係」

子どもの人間関係の希薄化が問題になる中で，親子関係や仲間･友人関係などの研究と比べて，笠原（1977）以降，「ナナメの関係」の重要性を指摘した研究や言説は少ないがいくつかはみられる（澤田，2003，2014；藤原，2005；宮澤，2011；竹内・池島，2012；枝廣，2016など）。

その中で宮澤（2011）は，子どもをめぐる教育関係の歴史からみて，近代化される前の伝統指向社会においては「タテとナナメとヨコの人間関係が，全体として子どもを社会化する機能を果たしていた」と指摘し，かつては「「ナナメの関係」が，タテとヨコという，対抗する関係が生みだす葛藤を緩和するための独自の機能をかかえていた」と述べている。筆者も，昔の伝統が残る地域へのフィールド研究を通して，親以外の様々な大人との関係の中で地域の子どもが育っていることを報告してきた（澤田，2013，2014）。しかし，近代の家族では「親以外の影響力をできるかぎりさけようとして，子どもを家庭内に囲いこみ」，近代の学校では「教師以外の大人の影響力を排除するばかりか，＜中略＞　子どもが自然発生的につくる異年齢共存の集団を解体しつつ，ひとりの大人の指導者が統制する同一年齢集団へと子どもたちを編成した（近代的学級集団）」と指摘する（宮澤，2011）。そして，この歴史を踏まえて，「タテ・ヨコ・ナナメの多様な関係のネットワークの重要性を再認識する」必要性を説いている。このように，子どもの成長には近代以前の社会ではタテ・ヨコの関係と並んでナナメの関係が重要な役割を果たしていたが，現代では多様なナナメの関係が家庭でも学校でも排除されてきた。子どもを取り巻く人間関係の課題は，「ナナメの関係」の復権にあるといえよう。

一方で，学校の実践において「ナナメの関係」を取り入れ始めたのは藤原（2005）である。彼は民間企業から公募に応じて公立中学校長に転身した教育者の一人で，これまでの公立学校にはなかったプログラム（よのなか科）の開設や，地域が学校の運営を支援する地域本部を立ち上げるなど，公立学校の教育に新しい視点を取り入れて実践してきた。ここでは，ナナメの関係を重視する点を，彼の言説を引用しながら述べていく。

藤原（2005）は，少子化等で学校の規模が小さくなると子どもが学校で出会う大人の数が減ることの弊害を指摘し，次のように述べている。「この先生は音楽の先生じゃないのにギターが弾けてスゴイとか，体育系でおっかないけど放課後も遊ばせてくれるとか，図工の先生が変人で面白いとか…多ければ多いなり，担任だけでなくナナメの関係からも影響が受けられる」と。また，保健室に通う子どもが多くなった理由として，「昔は怪我をしたり病気だったり，カラダの問題で保健室を訪れるものだったのが，いまではココロを癒やす場所として機能している感がある。＜中略＞　子どもたちはここでも，授業モードとは違う「ナナメの関係」を欲して保健室に集うのだ」と指摘し，養護教諭の学校の中での立ち位置が子どもにとって心を癒すナナメにあたる存在と位置づけている。そして，子どもの人間関係について，「直属の上下関係だけでは息苦しい。家庭における父と母との関係，学校における先生，とりわけ担任との関係のことである。かといって，友だちとの横の関係だけでも行き詰まる。＜中略＞　私たちは，「ナナメの関係」に支えられながら，より豊かな世界観や人生観を育むのだと思う」とナナメの関係が果たす独自の役割を述べている。つまり，ナナメの関係にあたる大人との関係から，子どもの生き方や人生観を広く学ぶ機会が与えられるとして，様々な生き方をしている講師を招いた「よのなか科」や地域の人がかかわる「地域本部」においてその実践を展開している。そして，彼の実践はその後の文部科学省の会議でも取り入れられ，議論されることとなった（文部科学省，2007）。

近年，学校や児童館等において，大学生などがボランティアとして子どもにかかわる機会が増えてきた。そして，その実践を「ナナメの関係」から検討した研究もみられる。竹内・池島（2012）は，中学生や小学生に対する進路支援において，「ナナメの関係」にあたる卒業生からの支援も取り入れ，ナナメの関係にあたる先輩からのメッセージが，児童生徒にとって先輩のモデルとして機能していることを報告している。また，枝廣（2016）は，中高生年代の生徒が「ナナ

メの関係」にあたる大学生や大学院生とかかわることによって，「紆余曲折してる人」と出会って優等生という縛りから解放された事例を紹介しつつ，「ナナメの関係」が生き方や具体的な未来を示すモデルとして機能し，進路に対する生徒の自己効力感を高めていることを報告している。

これまで紹介してきた研究では，学校等における「ナナメの関係」の重要性を指摘して行われてきた研究である。しかし，これらの研究で指摘している「ナナメの関係」が持つ役割や心理学的機能は，子どもにとってモデルや緩衝帯など，限定的なものである。生徒指導提要（文部科学省，2010）が指摘するように，学校には「援助資源が豊富」であることを「ナナメの関係」が豊富として読み替えると，ナナメの関係が持つ役割や心理学的機能をより広くとらえて分類・認識すること，そしてそれぞれの教員が担任というタテの関係からだけではなく，ナナメという役割や機能をあらためて意識しながら子どもと関わることは，生徒指導・進路指導上，非常に重要であると考える。

そこで次では，伯父と甥という「ナナメの関係」そのものを描いた山田洋次監督の映画「男はつらいよ－ぼくの伯父さん」において，山田監督が脚本・演出した「ナナメの関係」を分析することによって，子どもに対してナナメの存在が果たしている役割や子どもにとっての心理的機能を描出することを試みる。

3．映画「男はつらいよ－ぼくの伯父さん－」にみられるナナメの関係

かつては国民的映画として年に2回上映されていた山田洋次監督の「男はつらいよ」シリーズで，1989年に「ぼくの伯父さん」という副題のついた映画が製作された。渥美清演じる主人公の寅さんに対して心を開く浪人生の甥・満男とのかかわりを描いた映画である。満男の母・さくらの兄の寅さんは，1年の大半を旅先で暮らし，葛飾・柴又の実家（くるまや）には年に1・2回しか帰ってこない。甥の満男とも，帰ったときに話す程度であった。しかし，満男が大学受験に失敗して浪人生活を送る時期，親との関係もギクシャクしてくる。また，満男は高校時代の下級生に恋をするが，親には知られたくはない。そのような中で，伯父の寅さんが実家に帰ってくる。さくらは兄の寅さんに満男との最近の難しい親子関係について話をし，満男の話を聞いてやってほしいと頼む。そして，寅さんと満男は夕食を食べに（お酒を飲みに）出かけるのである。

この映画では，山田洋次監督が寅さんと満男とのやりとりを通して，親子の関係ではない伯父－甥関係，つまり「ナナメの関係」を描いている。ここでは，この映画の中で展開する寅さんと満男の具体的な場面を題材にして，ナナメの関係にはどのような役割や機能があるのかを明らかにする。

(1) 父・博，母・さくらと満男との家庭での会話から

表1は，映画の冒頭で展開する満男と母・さくら，父・博との朝食場面での会話と，晩に3人が家に帰った場面の会話を，映画から文字に起こしたものである。

朝食の場面で，母・さくらが満男に対して「朝，顔を合わせたらあいさつするのがうちの決まりだったでしょう」（ℓ．3）と聞くが，満男は無反応。幼いときから家庭内で作り，守ってきたルールを，青年期になって守らなくなることは，よくあることである。第二反抗期の特徴でもあり，子どもにとって幼少期から自然に（無自覚に）従ってきたルールに対して，青年期になって反発を覚えて異議を唱えること，そしてそこに自ら意味を見出したときに自分からそのルールを

表１　子・満男と父・博、母・さくらの会話のスクリプト
（筆者が映画より文字化したもの）

ℓ.	人	セ　リ　フ
		＜朝食の場面：挨拶をしないで満男が予備校に出かけるシーン＞　(0:04:20～0:06:32)
1	さくら	おはよう
2	満男	…（無言）
3	さくら	朝、顔を合わせたらあいさつするのがうちの決まりだったでしょう。いつから満男はしなくなったのかしら
		（満男が出かけた後）
4	さくら	（夫・博に対して）あの子、恋をしてるんじゃないかしら
5	博	そりゃあ、年頃だから好きな子の一人や二人はいるだろう
6	さくら	ねえ、父親として相談に乗ってやってよ
7	博	そんなこと、親父にいちいち話すわけないじゃないか
		＜さくらが夕食の準備をしていて、満男、そして博が帰宅するシーン＞　(0:08:14～0:10:02)
8	さくら	おかえり
9	満男	あー、腹減った
10	さくら	満男、手紙来てるわよ
11	満男	どこ？
12	さくら	及川泉さん。よく来るわよね、この子から
13	満男	なんでいちいち俺の手紙、調べんだよ
14	さくら	いいじゃないの。かわいい封筒だから、つい名前見ることだってあるでしょ。そしたら卒業アルバムに載ってたきれいなこの名前だから、ああ、この子から来たのかって
15	満男	そんなことまで干渉するなよ。俺のプライバシーだからな
16	さくら	満男、なんていう口の利き方するの。あんたが浪人してるから、私や父さんがどんなに気を遣っているか、あんたわかんないの？
17	満男	気なんか遣わないでいいよ
18	さくら	じゃあ、どうすればいいの。口利かなきゃいいの？
19	満男	自由にさせてくれりゃあいいんだよ
20	さくら	させてるじゃないの
21	満男	させてなんかいないよ。俺は監視されてるんだからな、朝から晩まで
22	さくら	まあ、呆れた
23	満男	俺の自由なんか猫の額ほどだよ
24	さくら	なんてこと言うのよ
25	博	（帰宅して）いい加減にしろよ、表まで聞こえてるぞ
26	さくら	博さん、聞いて。この子ったらね、私たちに監視されてるって。満男、待ちなさい
27	博	こういうことは後からにしてくれよ。俺は疲れて帰ってきてるんだから
28	さくら	ねえ、そんなこと言わないでちゃんと話し合ってちょうだいよ、いい機会なんだから
29	博	（満男に向かって）母さんに謝れ、お前が悪い
30	満男	なんで、理由も聞かないでそんなこというんだよ
31	博	近頃のお前の態度、問題だぞ
32	満男	俺が何したっていうんだよ
33	博	自分に聞いてみろ
34	満男	…（無言）
35	博	先に風呂に入る
36	満男	ああ、もうむかつくな
37	さくら	満男、あんたがそういう態度ならね、もうご飯なんか作ってあげないからね
38	満男	…（無言、バタンと自室のドアが閉まる音）
39	さくら	もう、ああ、腹が立つ

実行し始めるという流れである。

満男が出かけたあと，母親が気にしている息子の恋愛について，夫に「相談に乗ってやってよ」（ℓ.6）と頼むも，「そんなこと，親父にいちいち話すわけないじゃないか」（ℓ.7）と応える。自分の恋愛の話を簡単に父親には話さないことを，かつて青年時代を過ごしていた父親はよく理解しているのである。

そのような青年期の子どもと親との関係が展開する中で，晩の帰宅シーンで親子の言い合いが始まる。満男が帰宅したとき，満男宛の手紙の差出人が最近よく届く女性の名前であることを母・さくらが告げると，「干渉するなよ。俺のプライバシーだからな」（ℓ.15）といきり立つ。

そして，自由がない，監視されていると母親に抗う。その最中に父・博が帰ってきても，「俺は疲れて帰ってきてるんだから」（ℓ．27）とその争いの中に父親は入ろうとしない。それでも妻に留められると，息子の気持ちや理由も聞かないで「母さんに謝れ，お前が悪い」（ℓ．29），「近頃のお前の態度，問題だぞ」（ℓ．31）と決めつけて言い放ち，さっさと風呂に入る。満男も「もうむかつくな」（ℓ．36）と言って2階に上がり，一人残されたさくらは「ああ，腹が立つ」（ℓ．39）と言うしかない。

この場面は，山田洋次監督が表現した青年期の子どもと親とがぶつかる典型的なシーンであろう。学校や友人といった家庭外での生活や関係が中心となる青年にとって，家に帰っても外での経験を消化するには時間が必要である。一方で，子どもと顔を合わせて会話することが少なくなり，時に無視したり反抗的な態度をとる子どもに対して，親として子どもの成長が心配になり，時には口出しするのも当然のことであろう。まさに，これが親子というタテの関係であり，親は子どもを育てる責任を担っているとともに，ほぼ情緒的に巻き込まれた状況の中で，ともに生活を送る関係であるといえる。

(2) 伯父・寅さんと甥・満男の飲食店での会話から

前述のタテの関係とは違って，ナナメの関係では具体的にどのようなやりとりがなされ，その特徴はどのようなものだろうか。表2には，久しぶりに実家に戻った寅さんが，妹のさくらに頼まれて，甥の満男と夕食に出かけた時に交わす会話を示している。なお，この場面は，未成年の満男に伯父の寅さんが酒を勧める場面もある。未成年の飲酒について，寛容さのあった時代であることが反映されていることを付記しておく。

ここでは，伯父・寅さんと甥・満男の会話の中で，ナナメの関係が果たしている役割や機能が表れている箇所をあげながら，その特徴を述べていく。

まず，飲食店で酒とお通しが出され，満男が寅さんに酒を勧められて，それを一気に飲んで吹き出す場面で，「なんだ，おい。酒の飲み方から教えなきゃなんねえのか？」（ℓ．3）という寅さんの問いかけは，「酒の飲み方」という家庭内等ですでに教えられていると思われる事柄を伯父さんが教えるという，タテの関係でなされていないことの補完的な意味がある。また敷衍していうと，すでに家庭というタテの関係で教えられている事柄であっても，ナナメの関係で別の作法や別の意味づけによってあらためて教えられることでもあろう。

次に，女性店員が料理を運んできた際に，「ありがとう。お姉ちゃん，きれいだね」（ℓ．11）と寅さんは声を掛け，「こうやってな，お世辞を言っておくと後でサービスがよくなる」（ℓ．13）と説明を加える。このように，おおよそ親からは教えられることのない社会での裏の作法についても，伯父さんから甥に伝えられるのである。

この席の本題に入る場面になると，寅さんは「さて，満男。さあ，何でも聞くか」（ℓ．14）ともちかけ，「親にも言えない悩み事があるんだろう」（ℓ．16）と打ち明け話の開示を求める。そして，しばらくやりとりのあった後，「お前，まさか？」（ℓ．22）とカマをかけ，甥が恋心を抱いていることを引き出す。満男は父親にはおよそ言えない自身の恋心をぽつぽつと話し始め，彼女の置かれた状況や自分の勉強の手につかなさ，彼女への想いを責める自分などを話す。寅さんはしばらく満男の話に耳を傾けた後，満男の父・博が母・さくらを見初めた頃の話をする。そして，「お前の親父が，3年間，じーっとさくらに恋をして，何を悩んでいたか。今のお前と変わらないと思うぞ」（ℓ．38）と，満男の父親の若い頃を想像させて，今の自分と比較しながら父親を理解することを促す。その後，気が楽になった満男に対して，寅さんの恋愛遍歴の話が始ま

表２　伯父・寅さんと甥・満男の飲食店での会話のスクリプト
（筆者が映画より文字化したもの）

ℓ.	人	セ　リ　フ　（0:18:05～0:26:27）
1	寅さん	さあ、満男。お前も一人前だ、な。さ、一杯いこ
2	満男	いただきます。ブー（お酒を吹き出す音）
3	寅さん	なんだ、おい。酒の飲み方から教えなきゃなんねえのか？
4	満男	どうやって飲むの？
5	寅さん	どうやってって。いいか、まず片手に盃をもつ。酒の香りを嗅ぐ。な、酒のにおいが鼻の芯にずーっと染み通った頃、おもむろに一口飲む。さあ、お酒が入っていきますよということを五臓六腑に知らせてやる。な、そこでここに出ている付き出し、これを舌の上にちょこっと乗せる。これで酒の味がぐーんとよくなる。それからチビリチビリ、だんだん酒の酔いが身体に染み通っていく。それを何だお前、かけっこしてきたやつがサイダー飲むみたいにガーッと飲んで、胃袋が驚くよ、それじゃあ。わかったか？
6	満男	（満男、頭をかく）
7	店員	（店員が鍋を運んでくる）　はい、どうぞ
8	寅さん	はい、ありがとよ
9	店員	もう、煮えてますんで、どうぞ
10	寅さん	はい、ありがとう。お姉ちゃん、きれいだね
11	店員	おじさん、もう
12	寅さん	こうやってな、お世辞を言っておくと後でサービスが良くなる。さあ、熱いうち食え食え、な
13	満男	いただきます
14	寅さん	さて、満男。さあ、何でも聞くか
15	満男	何を？
16	寅さん	親にも言えない悩み事があるんだろう。たとえば高い物が欲しいとか、ん？　こう行く電気機関車か？　それとも顕微鏡か？
17	満男	俺をいくつだと思ってんだよ
18	寅さん	じゃあ何だ？　えー？　あ、わかった。お前、流行歌手になりたいんだろ？　伯父さん、それだけは反対だ
19	満男	そんなことじゃないよ
20	寅さん	じゃあ何だよ。思ってること、スーッと言えよ、お前。伯父さん、何聞いても驚かないんだから（間）あれ？
21	満男	何？
22	寅さん	お前、まさか？
23	満男	そんなんじゃないよ
24	寅さん	ほ、赤くなりやがった、こいつ。誰だ？　近所の娘か？　それとも高校の同級生か？
25	満男	違うよ、下級生だよ。言っちゃったよ
26	寅さん	ばかだな。よし、全部言っちゃえ、な。全部話したら気が楽になるから。で、その下級生とはどうなった？
27	満男	別に。ただ、きれいな子だなって思って、遠くから見ていただけだよ
28	寅さん	ふん、ふん
29	満男	でも、俺が卒業した後、両親が離婚して、お母さんに付いて名古屋に行ってしまって。そのこと聞いて、かわいそうだなって思ってたんだ。そしたら、あれは 6 月の終わりごろだっけな、その子から突然手紙が来て、先輩と一緒だった葛飾の高校が懐かしくてたまりませんって。そんなことが書いてあって。その時から俺、ぜんぜん勉強が手につかなくなっちゃって。参考書を見てるんだけど、頭ん中はあの子のことでいっぱいなんだ。じっとしてると、だんだん胸が痛くなって、吐き気がしたりして、俺は馬鹿じゃねえかな、自分が情けなくて
30	寅さん	恋をしてるのか、お前は。へえ、この間まで飴玉ひとつやりゃあ、喜んで飛んできたガキだと思っていたのに、あー、恋をする歳になったか
31	満男	違うよ、おじさん。俺のは恋なんかじゃないよ
32	寅さん	ほう、どう違うんだ？
33	満男	だって、恋っていうのは、美しい人を美しく思う気持ちのことだろう？
34	寅さん	その通り
35	満男	でも俺のは、ちっとも美しくなんかないよ。不潔なんだよ。だって俺、ふと気づくと、あの子の唇とか胸とか、そんなことばっか考えてるんだよ。俺に女の人を愛する資格なんてないよ
36	寅さん	お前は正直だな。偉い。さすがは博の息子だ
37	満男	俺のどこが偉いんだよ、調子のいいこと言うなよ
38	寅さん	まあ、聞け。俺はな、学問つうものがねえからうまいこと言えねえけども、博がいつか俺にこう言ってくれたぞ、自分を醜いと知った人間は決してもう醜くねえって。な、考えてみろ。田舎から出てきて、タコの経営する印刷工場で職工として働いていたお前の親父が、3 年間、じーっとさくらに恋をして、何を悩んでいたか。今のお前と変わらないと思うぞ。そんな親父をお前、不潔だと思うか？
39	満男	（間）　やっぱり伯父さんは、苦労してるんだな
40	寅さん	少し、気持ち楽になったろう
41	満男	おかげさまで
42	寅さん	うん、それじゃあ、伯父さんの色談義を少し聞かせますか？
43	満男	お願いします
44	寅さん	こずえちゃん
45	店員	お酒？
46	寅さん	ああ、2、3 本、まとめて持ってきてくれや
47	店員	OK
48	寅さん	満男、今夜は羽目を外して徹底的にやるか
49	満男	今日は飲みますよ

表3　伯父・寅さんと甥・満男が帰宅する場面のスクリプト
（筆者が映画より文字化したもの）

ℓ.	人	セ　リ　フ　（0:26:37～0:30:00）
1	満男	伯父さん、着いたよ
2	さくら	どうしたの？
3	満男	えへへへ
4	寅さん	あー。あー、酔っ払った、酔っ払った。あー、満男はほんとに酒に強いな、これ。親父に似たんだな、死んだ親父にそっくりだ。おばちゃん、お冷
5	店員	すみません。あの、お勘定をいただきたいんですけど
6	満男	えへへへ、伯父さん、金持ってねえんだもんな
7	店員	私あの、タクシー代は2500円で、私、これから市川に帰りますけど、それは自分で払いますから
8	さくら	どうもすみません。わざわざ付いてきてくださったんですか？
9	寅さん	そう、こずえちゃんって言うんだ。美人だろ？
10	さくら	（お金を渡して）どうぞ
11	店員	私はつけにしてあげてもいいと思ったんですけど
12	さくら	とんでもない。あの、おつりは結構ですから
13	店員	すみません。じゃあ、寅さん。また来てね
14	寅さん	ご苦労さん
15	さくら	お疲れさまでした
16	満男	さよなら、バイバイ （間）
17	満男	気持ち悪い
18	寅さん	ん？
19	満男	母さん、気持ち悪いよ、俺
20	博	バシーン（頬をたたく）
21	寅さん	あ
22	満男	痛え、痛えな、畜生
23	寅さん	何だよ、博。どうして満男のこと殴るんだ？
24	博	あんまり情けないからですよ
25	寅さん	バカ野郎、何が情けねえんだ。満男はちゃーんと育ってるぞ。もしかしたら俺よりましかもしれない
26	満男	なんだ、バカ野郎
27	寅さん	なんでそんなこと言うんだよ
28	博	そうですか、兄さんよりましですか。そりゃあ、大したもんですね
29	寅さん	なんだそれ。お前いったい何が言いたいんだ
30	さくら	お兄ちゃん、わたしたちはね、この子の話を聞いてやってほしいとは言ったわよ。でも、何もこんなにお酒飲ませることないじゃないの
31	寅さん	なんだい、満男に酒飲ませちゃ悪いのか
32	つね	悪いに決まってるじゃないか、未成年だよ、この子は
33	寅さん	何言ってんだ。俺なんか15の時からずーっと酒かっ食らってんだよ
34	竜造	だから、ろくなもんにならなかったんだよ
35	寅さん	ろくなもんにならなくて悪かったよ、おじちゃん
36	竜造	さくら、言わんこっちゃないだろう。この馬鹿が満男の相談相手になれるわけないじゃないか
37	寅さん	バカとは何だよ
38	つね	バカだからバカなんだよ
39	寅さん	うるせえ、じじいとばばあ
40	さくら	やめてよもう、お願いだから、ね
41	寅さん	さくら、この満男はな、なかなかいいやつだぞ、こいつは
42	さくら	わかった、わかった。お兄ちゃんには感謝してるから。いつもありがとう
43	寅さん	俺はね、お前に頼まれたからつきあって
44	博	さくら、帰ろ
45	つね	満男、うちに泊めたら
46	博	いいんですよ、こんなのは。河原に寝っ転がってりゃあ。行くぞ
47	さくら	おじちゃん、ごめんね
48	つね	気をつけてね

るのである。

(3) 寅さんと満男の帰宅後の家族との会話から

表3には，寅さんと満男がタクシーで帰宅した後に，登場人物の間で交わされた会話を示している。寅さんと満男が十分お酒に酔って帰宅した姿を見て，みなは一様に戸惑いを示す。そして，さくらがタクシーで送ってくれた女性店員に飲食代の支払いをしながら，「わざわざ付いて

きてくださったんですか？」（ℓ．8）と尋ねる。伯父が甥に教えた「お世辞を言っておくと後でサービスが良くなる」（表2，ℓ．12）ことが実現しているのである。それらの様子を忸怩たる想いで聞いていた父・博は，満男が「気分悪い」（表3，ℓ．19）と告げた際，満男の頬を思いっきり引っ叩く。驚く寅さんに，息子を「情けない」（ℓ．24）と言い放つ父。すかさず伯父の寅さんは「満男はちゃーんと育ってるぞ」（ℓ．25）と義弟に主張する。そして，酔った中でも，妹・さくらに対して「この満男はな，なかなかいいやつだぞ」（ℓ．41）と甥の満男を弁護する。

4．子どもに対してナナメの存在が果たしている役割・機能とは

子どもの人間関係は，大きく「タテ」「ヨコ」「ナナメ」の3方向からとらえることができる。「男はつらいよ」でいうと，満男にとってタテの存在は父・博であり母・さくらである。ヨコの存在は映画には登場してこないが，予備校の同級生や高校までの元同級生とはヨコの関係といえるだろう。そして，ナナメの存在が伯父・寅さんである。なお，くるまやの主人の竜造やつね，隣の工場の社長などもナナメの存在ではあるが，この作品の中ではそのような役割としては登場してこない。

子どもにとってタテの存在は，親あるいは学校でいえば担任教師にあたる。その関係は，その子どもの養育や教育を施す存在であり，必要な場合は保護しつつ，子どもの成長の第一義的な責任を負っている存在である。養育や教育において責任をもっているので，親や担任教師は子どもに支配的にならざるを得ないときがあり，子どももそれに従わざるをえないこともある。このような関係であるため，反抗期において子どもの反抗の対象となるのもこのタテの存在になるのである。

それに対してヨコの関係は，子どもにとって同じ地平に立つ同年代の仲間との関係になる。同年代の仲間との関係は基本的に対等であり，学校や遊び場面では協同して活動に取り組んだり，互いに競い合ったりする存在である。つまり，ヨコの関係は互いを受け入れ認め合い，時には排除しながら関係を深めていくとともに，互いを高め合う（時には傷つけ合う）存在なのである。また，子どもにとってタテの関係にあたる存在ほど自分を保護してくれるわけではないので，仲間との関係が「他人性の経験」（住田，1995）を得る社会化にとって重要な契機となる。さらに，仲間との関係は加齢とともに特徴が変わっていき，保坂･岡村（1986）は，児童期の「ギャング・グループ」，青年期前期の「チャム・グループ」，それ以降の「ピア・グループ」へと発達的に展開していくことを示している。

それでは，近年希薄化が進むナナメの関係にはどのような特徴があるのだろうか。子どもにとってナナメの関係にあたる人は，先にもあげたように，親や担任教師以外の大人すべてがナナメの存在になる可能性があるといえよう。しかし現実的には，寅さんのように，子どもにとって血縁的に一番近しい親以外の大人であるおじ・おばがその存在になりうるであろう。また，子どもの近くにいる大人がその子どもに対して何らかの関係をもったとき，子どもにとってその大人がナナメの存在になりうるのである。たとえば，隣に住む人やよく買い物に出かける店の人，塾や習い事の先生，保健室の養護の先生などである。子どもが出会うこれらの大人と，単なる一義的関係を超えて，つまり単に隣に住む，商品を売る，技芸や勉強を教えてくれる，怪我の手当をしてくれるといった関係にとどまらず，何らかの私的関係を含んだ展開を見せた時，その大人は子どもにとってナナメの関係の存在になりつつあると考えることができる。それでは，子どもにと

ってナナメの存在は，その一歩進んだ関係の中でどのような役割を果たしているのであろうか。あらためて伯父・寅さんと甥・満男の関係から探っていくことにしよう。

表4は，伯父・寅さんと甥・満男との間で交わされる会話から，タテ・ヨコの関係と対比しながら，伯父－甥というナナメの関係の特徴と機能をまとめたものである。

(1) 遊び・話し相手としての役割・機能

まずあげられるのが，子どもが世間話や最近の話などを交わす相手，また子どもが小さいときであれば一緒に遊ぶ相手という役割である。久しぶりに会った伯父・甥であれば互いの近況の話をしたり，商店の店員さんと最近の売れ筋の話を聞いたり，学校の先生であれば趣味の話をするなど。そしてこのようなやりとりが次に展開するナナメの関係の深化につながるきっかけとなる可能性を秘めている。先に指摘したナナメの関係の希薄化の観点から考えると，これらの一見何気ない日常生活のコミュニケーションは，極度に効率化された日常生活の多くの場面で第一義的なやりとりに終始することとなり，余白のやりとりが少なくなってきていることが希薄化につながっているといえよう。

(2) 相談相手としての役割・機能

次にあげられるのが，先の世間話から展開する子どもの方からナナメの存在に相談を持ちかけるという相談相手としての機能である。「男はつらいよ」においても，伯父の寅さんの問いかけに応じて，自身が想いを寄せる彼女のことをぽつりぽつりと話し始める。子どもがその大人に対して自己開示をするという段階に進むには，両者の日常的なやりとりを通して，子どもが相手に対して最低限の信頼感を持つに至ることが条件となろう。また，笠原（1977）が述べているように，子どもが生活している世界から離れている大人ほど，自己開示がしやすいのかもしれない。

表４　タテ・ヨコ・ナナメのそれぞれの関係の相手の属性と役割・機能

関係	相手の属性	関係の役割・機能と「男はつらいよ」における例
タテの関係	親、担任	養育－被養育・教育－被教育関係、養育・教育の責任者、支配－服従関係
ヨコの関係	仲間、同級生	基本的に対等、協同する仲間、競争する相手、他人性を経験する機会
ナナメの関係	おじ・おば 近所の人 習い事の先生 塾の先生 保健室の先生 etc.	(1) 遊び・話し相手 「（お酒を）どうやって飲むの？」（表２：ℓ. 4） (2) 相談相手 「ただ、きれいな子だなって思って、遠くから見ていただけだよ」（表２：ℓ. 27） (3) 通訳・翻訳者 「お前の親父が、何を悩んでいたか。今のお前と変わらないと思うぞ」（表２：ℓ. 38） (4) 理解者・仲介者 （父・博や母・さくらに対して）「満男はちゃーんと育ってるぞ」（表３：ℓ. 25） (5) 新しい視点・生き方・価値の提供者 「お世辞を言っておくと後でサービスがよくなる」（表２：ℓ. 13） (6) モデル 寅さんの生き方

つまり，子どもにとって最低限の信頼があるという点では近い関係でありながらも，子どもが生活している世界からは離れているという点では比喩的にも「ナナメ」の立場が，子どもが自分の内面を開示しようと思わせる点であろう。

(3) 通訳・翻訳者としての役割・機能

子どもの話す相談内容に親との関係，担任教師との関係がのぼってきたとき，そのタテの関係を大切だと考えるナナメの存在であれば，寅さんのように「お父さん（担任）は，○○という思いがあってそう話したんじゃないかな」と親・担任の言葉や想いを補って，子どもに伝える翻訳機能を果たす場面も出てくる。タテの関係にあたる大人は，子どもと一番近い人物で愛憎が交錯する関係にある。近い人物だからこそ，子どもの「わかってもらえていない」という気持ちも増大する。また，子どもは自分を評価する大人だととらえてもいる。このような中で，タテの存在から子どもに向けられる言葉や行為が，子どもにはすぐには受け入れられないことも反発を招くことも多く発生する。そのようなタテの関係だからこそ，ナナメの存在からの通訳・翻訳は，親や担任に対する子どもの反発を和らげるとともに，子どもの知らない親や担任の想いを知る重要な機会となり，間接的にタテの関係を改善するきっかけにもなりうる機能だといえる。

(4) 仲介者としての役割・機能

先にも触れたように，「男はつらいよ」で満男の頬を叩いて「情けない」と話す父・博に対して，寅さんは「満男はちゃーんと育ってるぞ」と強く弁護する場面がある。つまり，親の言葉を通訳・翻訳するという間接的なタテの関係の改善支援だけにとどまらず，甥の良き理解者として実際に親と子どもの間に入って，関係改善にあたる場合である。相互に思っていること，感じていることを出し合う仲立ちをしたり，これまで子どもが親や担任に対して言えなかったことを言えるように仲介したり，子どもに代わってナナメの者が子どもの想いを親に伝えるという直接的な仲介機能である。この役割･機能は，直接，タテの関係に介入するという意味では，ある程度，親や担任と良好な関係にある大人しか担うことができないのかもしれない。

(5) 新しい視点・生き方・価値の提供者としての役割・機能

この役割・機能は，これまであげてきた段階的に深まっていくものとは異なり，ナナメの関係という第三者的存在だからこそ提供できるものであり，次にあげるモデルと合わせて，藤原（2005）や枝廣（2016）らが指摘した役割である。子どもには，親や担任が示す生き方やものの見方，その背後にある価値観などは，ごく当たり前のものとなっている。年齢が進むにつれて，その枠組みだけではない別のとらえ方があるとは感じるようになりながらも，ナナメの存在から直接伝えられるそれは，これまで当たり前であった枠組みを超えたものの見方，生き方，価値を提供することとなる。テレビや本から学ぶだけでなく，子どもが親しい人間から直接伝えられ，知っていく多様な見方や価値観は，社会の中で自分はどう生きるのかを考える大切な機会となる。なお，ある子どものタテの関係にあたる人でも，他の子どもからはナナメの存在となり，関係が展開したときタテの関係では見せない別の側面を見せることができる。関係が変われば見せる側面も変わる人間関係の不思議で面白い性質でもある。

(6) モデルとしての役割・機能

この役割・機能も段階的に深まっていくものではなく，子どもがナナメの関係にあたる人と親しくなっていくに従って「あの人みたいになりたい」という憧れから，その大人へ同一化が生じるものである。もちろん，子どもにとって第一のモデルは身近な親や担任というタテの関係で生じるものであろう。しかし，それがなされなかったり，広がりをみせるとき，異なる生き方を体

現している親しい存在は生き方の手本となり，子どもが実際に真似て生き方を試してみる機会を与えてくれるだろう。

5．学校における「ナナメの関係」

これまでの学校における生徒指導・教育相談には，学級担任が一人で問題を抱え込み，解決しなければいけないという風土や，それが一人前の教員の姿だという固定概念があった。しかし，一人ひとりの児童生徒の人格を尊重し，個性の伸長を図りながら，社会的資質や行動力を高めるように指導，援助していく生徒指導は，近年の子どもやその家族が抱える問題・課題が複雑化している時代の変化の中で，担任一人が抱え込むのではなく，学校として組織的・体系的に取り組む必要性に迫られてきた。そこで文部科学省（2010）は，初めて生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書「生徒指導提要」を取りまとめた。

生徒指導提要の中で「ナナメの関係」に関わる記述に注目すると，学校の特質の一つとして「援助資源が豊富」（p. 99）という点をあげることができる。「学校には，学級担任・ホームルーム担任を始め，教育相談担当教員，養護教諭，生徒指導主事，スクールカウンセラーなど，さまざまな立場の教員」がおり，「校長，教頭は管理職ならではの指導・支援」ができる。また，「専科教員や授業担当者，部活動の顧問」に加え，「スクールソーシャルワーカーといった外部人材（非常勤職員）も配置され始め」ている。つまり，「学校には一人の児童生徒をめぐって様々な教員が多様な関わりを持つことができ，特にその児童生徒の良いところを認め励ますことによって児童生徒を支えていくことができることが特徴であり，大きな利点」だと指摘しているのである。これこそ，どこの学校も持っていて，これから将来にわたって活かされて機能化されるべき大きな学校の特質である。学校には，学級担任というタテの関係，同学年の児童生徒であるヨコの関係，そして豊富な「ナナメの関係」があり，地域関係が希薄する中，それらの豊富な関係の中で一人ひとりの児童生徒はそれぞれの個性が受け止められ，社会的に自分の力を発揮していくのである。

学校には援助資源となるナナメの関係が豊富であると述べたが，その資源を有効にしていくためにも，各教員がそれぞれの児童生徒との関係においてどのような役割や機能を果たしているのかを意識して照合しながら，それぞれの関係を展開していくことが望まれよう。以下には，先に分類したナナメの関係の役割・機能を，学校の生徒指導や進路指導場面を想定しながら述べていく。

(1) 話し相手としての役割・機能

教員が担任ではない児童生徒と関わる場面としては，教科の授業やクラスを越えた委員会活動，部活動などがあげられる。それらの場では，その活動の主たる目的にもとづいて教員と児童生徒がかかわることになるが，その前後や合間で交わされる世間話が，ナナメの関係の第一歩となる。

(2) 相談相手としての役割・機能

先の世間話の流れの中で，児童生徒の側からの自己開示が相談としてあがってくることがある。愚痴として話されたり，ただ教員に聞いてもらいたいと思っている場合もあれば，人間関係や将来の進路について教員からのアドバイスを求めてきたり，何らかの具体的対応を求めている場合もある。

(3) 通訳・翻訳者としての役割・機能

児童生徒の話す相談内容に親との関係，友だちとの関係，担任との関係などがのぼってきたとき，それぞれの相手の想いを想像しつつ，言葉を補って児童生徒に伝える翻訳機能を果たす場面も出てくる。ナナメの存在からの通訳・翻訳は，親や担任の願いや期待，友だちの想いを別の角度からとらえ直す重要な機会となり，間接的にその関係を改善するきっかけにもなる。

(4) 仲介者としての役割・機能

通訳・翻訳するという間接的な関係改善の支援だけにとどまらず，直接，関係改善にあたる必要もでてくる場合もある。双方の想いや願いなどを出し合う仲立ちをしたり，これまでその児童生徒が主張できなかったことを相手に言えるように手助けしたり，その児童生徒に代わってナナメの者が相手に想いを伝えるという直接的な仲介機能である。

(5) 新しい視点・生き方・価値の提供者としての役割・機能

児童生徒に対して，親や担任が示してきた生き方やものの見方，その背後にある価値観を否定するのではなく，それらとは異なるものの見方やとらえ方を提供する役割・機能である。その示し方は言葉による提供だけにとどまらず，その教員が実際の振る舞いや活動として示すことによって，児童生徒にも具体的な生き方・将来像として伝わっていく。

(6) モデルとしての役割・機能

児童生徒にとって，それぞれ印象に残る生き方をしている人に対して「あの先生みたいになりたい」と強い憧れをもって自分の将来と重ねた場合，同一化の作用が展開することになる。同一化の作用は単に印象に残った側面だけにとどまらずに様々な側面に及び，すべての面でそのモデルを真似る（取り込む）強い作用も出てくる可能性がある。

6.「ナナメの関係」がチームとして機能する生徒指導・進路指導へ

これまで述べてきたように，学校には豊富なナナメの関係が存在し，その役割を活かせば，一人ひとりの児童生徒の個性を受け止めることができるのかもしれない。文部科学省（2015）が示

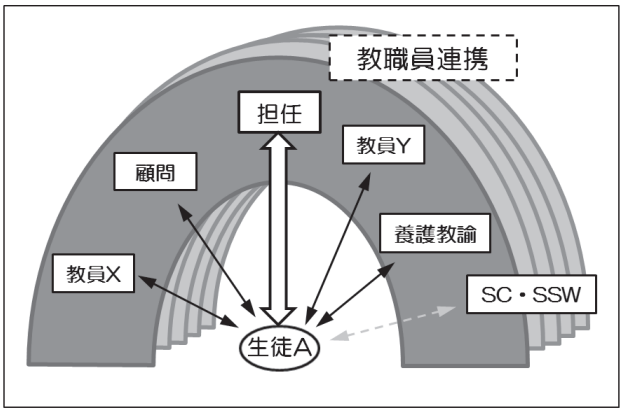

図1　生徒と教職員とのタテ・ナナメの関係摸式図
（SCはスクールカウンセラー，SSWはスクールソーシャルワーカー）

した「チームとしての学校」も機能することになる。「チームとしての学校」がでてきた背景と方策には，①多様で変化に富むこれからの社会に柔軟に対応できる資質・能力をもった子どもを育成するアクティブ・ラーニングの導入，②複雑化・多様化した社会・家庭・子どもの問題に学校として対応していくための心理・福祉・特別支援の専門職スタッフ等の配置の必要性があげられている。このような方策が進められると，児童生徒が学校内で見せる側面がさらに多様化し，それらの側面を見せる大人も確実に多様になっていくことが予想される。そして，一人ひとりの児童生徒が多くの大人に対して見せる多様な側面を受け止めるためにも，教職員が豊富な「ナナメの関係」を教職員間で共有して多層的な児童生徒理解につなげていく必要がある（図１参照）。このようなナナメの関係を媒介にした教職員連携は，従来の担任教師を中心にした生徒指導・進路指導から，多面的な理解と多方向からの支援・指導につながると考えられる。またこの連携を通して，生徒指導上の問題を予防するとともに，問題が発生したときにも多くの教員が連携して対応できる体制になると思われる。

教職員連携を考えるとき，問題になるのが最初でも述べた教員の多忙化である。1970年代までの学校には，職員室でストーブを囲んで児童生徒のことを話したり，廊下で通りすがりにちょっとした情報交換をしたりする光景があった。かつては，そのような日常的な情報交換を通して，担任は自分のクラスの児童生徒のさまざまな側面に気づくことができ，他の教員からアドバイスをもらったり，他の教員と連携して働きかけたりすることができていた。しかし，近年問題となっている教員の多忙化は，担当授業とその準備，事務書類の作成，学級運営といった業務を，各教員の個別業務へと押しやり，担任する児童生徒に特別な指導や配慮が必要な場合にのみ組織的な連携がなされるという状況になってきた。このような状況の中で，手軽に，迅速に，的確に，教職員が伝え合う仕組みや風土をどのように再構築していくか。この点については，別稿であらためて議論したい。

７．引　用　文　献

枝廣和憲　2016　中高生年代の能動的居場所に関する学際的研究：ナナメの関係の観点から　科学研究費助成事業　研究成果報告書

藤原和博　2005　公教育の未来　ベネッセコーポレーション

保坂亨・岡村達也　1986　キャンパス・エンカウンター・グループの発達的・治療的意義の検討 心理臨床学研究，4，15-26.

笠原　嘉　1977　青年期：精神病理学から　中公新書

宮澤康人　2011　＜教育関係＞の歴史人類学：タテ・ヨコ・ナナメの世代間文化の変容　学文社

文部科学省　2007　いじめを早期に発見し，適切に対応できる体制づくり：ぬくもりのある学校・地域社会をめざして　子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議まとめ（第1次）

文部科学省　2010　生徒指導提要

澤田英三　2003　居場所としての駄菓子屋：子どもとおばちゃん・おじちゃんとのななめの関係の実際　住田正樹・南博文（編）　子どもたちの居場所と対人的世界の現在　九州大学出版会　Pp.319 ～ 343.

澤田英三ほか　2013　豊島の地域文化・養育文化を見直しその現代的意味を考える　豊浜町史編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）豊浜町史　資料編，呉市役所，Pp.825-849.

澤田英三　2014　三重県答志島の青年宿・寝屋子制度と青年期発達に関する基礎資料．安田女子大学紀要，42，91-99.

住田正樹　1995　現代社会の変容と子どもの仲間集団　内田伸子・南博文（編）　講座生涯発達心理学3　子ども時代を生きる―幼児から児童へ，金子書房，Pp.207-240.

竹内和雄・池島徳大　2012 「ナナメの関係」を意識した進路指導：進路指導に活かすピア・サポート活動　教育実践開発研究センター研究紀要（奈良教育大学教育実践開発研究センター），21，215-220.
山田洋次（原作･監督） 1989　映画「男はつらいよ：ぼくの伯父さん」 松竹 （DVDビデオ　松竹株式会社･東芝デジタルフロンティア株式会社）